

E.W.クラークのNew-York
Evangelist投稿記事(その2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-07-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 刀根, 直樹, 今野, 喜和人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005753

E. W. クラークの *New-York Evangelist* 投稿記事 (その2)

刀根直樹訳・今野喜和人監修

はじめに

前号に引き続き、明治初期の静岡学問所に赴任した御雇い米国人教師 E. W. クラーク (Edward Warren Clark, 1849-1907) が母国の新聞 *New-York Evangelist* に送った投稿記事を翻訳する。1 の記事は前号に翻訳掲載した 1 (同紙1872年2月22日付け) よりも時間的に前のものであるが、その後の刀根の調査で新たに入手できたので掲載した。いずれもクラークの著書 *Life and Adventure in Japan* (1878) (飯田宏訳『日本滞在記』講談社、1967年) のための材料となった記事で、重複もあるが、著作に採用されなかった細かい事情も読み取れて興味深い。なお、挿絵は同書掲載のものである。

1. *New-York Evangelist* 第 2181 号 (1872 年 1 月 11 日)

日本通信

〔当記事の寄稿者(オルバニー在住の神学博士ルーファス・W・クラーク[Rufus W. Clark] 師のご令息)が横浜へ航ったのは去る10月のことである。日本からの打診に魅力を感じた彼は、自然科学、フランス語、英語を教えるため、化学器具など様々なものを携えて出向いたのであった。ところが着任にあたって契約書に署名しようとしたところ、その中に宗教教育を禁止する条項が盛り込まれていることが発覚したのである。条項は帝国政府の起草したもので、抗議しても意味がないと告げられた。しかし彼は何を言われようと、そのような取り決めに署名することを断固拒否した。そして最終的には、クラーク氏と雇い主の大手柄ということになった。クラーク氏の勇ましい抗議は実り、信教の自由が保障されたのだ。

かのピーチャー博士がこう述べたことがある。「男子たるもの立つべきときは

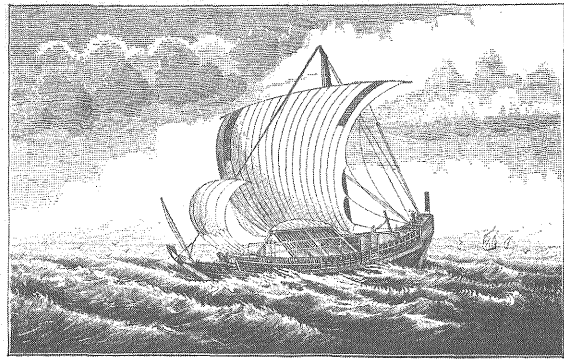
断固として立たざるべからず」。今回の一件は、文明化とキリスト教に貢献したという点で、書き伝えておくべき事例である。日本人のとある名士はクラーク氏にこう伝えたという。「先生は、日本の強固な壁を打ち破られたのです。」

11月12日（日）、横浜にて——ついさっきまで、私はある飾り気のない小さな部屋に行っていた。そこが私たちの「教会」、外国人が集まる場所なのだ。今日は私にとって日本で初めての聖餐式であり、おそらく長きにわたって最後の聖餐式の日ということにもなる。なぜなら私はこの先、一人のキリスト教徒もない場所に旅立たねばならないからだ。式では、中国北部の宣教師ヒューストン牧師より素晴らしい説教を賜った。われら主のお約束を信ずる者は、キリストの御許にて全き死後の安寧を得るであろう、という内容である。礼拝の喜びが増せば増すほど、ある感情が私の胸に切々と迫ってきた。それは、これから自分は聖なる信者の集いから一切引き離され、キリスト教徒の絆がもたらす心強さや福音の声を思い焦がれるばかりなのだろう、という喪失の感情である。

キリスト教の国を離れ、異教の様子を初めて目にした新参者の胸中は、なかなか想像してもらえないかもしれない。異教について長い間耳にしてはいたものの、実際に見るのはまったく初めてのことだった。安息日が存在しないどころか、十戒が記されたという事実さえも無かったかのである。日曜日にもあらゆる方向から労働の音が聞こえてきて、人々の悪しき振る舞いには罪と退廃がはびこっている。教会の鐘の代わりに、異教の寺の鐘の音が時おり聞こえた。巨大な鐘の音は重々しく長く響き、また一人、偶像にひざまずく者が参詣に訪れたことを知らしめているかのように鳴り渡る。教会音楽が聞こえない代わりに、近くの中国人墓地からは爆竹の音が聞こえてきたのだが、何とそこでは死者の霊を拜んでいるのである。先日江戸で寺院を回った際に目にしたのは、何百人もの人間が偶像の前にひれ伏して、彼らの神々に祈りを奉げている様子であった。それは、私が今までに見たもののなかで最も痛ましい光景に映った。そして、日本の首都に住む、キリストの御名を聞いたこともない大衆の中に立ち入ってみると、事があまりに重大すぎて、現実とは思えなくなってくるのである。ことによると私も次第に異教の信仰と習俗とに慣れ、その現実の痛ましさを感じなくなるかもしれない。それでもしかし、虚妄に迷う哀れな魂を改悛に導こうという真剣な情熱だけは決して失わないはずだ。機会があって日本人生徒向けに開いたバラ師 [James H. Ballagh] のバイブル・クラスを見学したのだが、その光景には大いに興味をかきたてられた。学生たちがたいへん真面

目に、集中して、意欲的に学んでいたからである。

11月14日——先日ブライン夫人 [Mary P. Pruyn] と私は、宣教師の一行とともに日本の小さな蒸気船を仕立て、広く美しい江戸湾へと繰り出した。湾では各国の船に行き会った。江戸への進



A JAPANESE JUNK.

入路を監視する堡塁 [品川台場] には大砲もかなりの数が据えてあったが、包囲攻撃に持ちこたえられそうもなかった。目にしてみても驚くのは、日本人が立派な帆船や蒸気船を数多く所有しているという事実である。周りを囲むぼろ舟やジャンク船と比べると奇妙なほど対照的であった。甲鉄の衝角艦「ストーンウォール・ジャクソン」の姿もあったが、これはもと [南北戦争時に] 南部連合軍の所有であったものが、のちアメリカ政府から日本に贈られたのである¹。

市街地のほうへ近づくと、数多くの家々や小屋や竹垣などが茫洋と広がっていた。ここにはドックも埠頭もないし、倉庫群もなければ舗装路も歩道もない——またわれわれが家と呼ぶようなものは一軒としてない。しかし背の低い草葺き屋根の住居だけはその数も多く、見渡す限り一面に広がっていた。ところどころ高い建物が見えるのは仏教の寺で、木々に囲まれて絵画的な趣を呈している。街の中心部は土地が一段高く、そこに位置を占めるのが江戸城である。城の周りは白壁に囲まれているが、陽の光を浴びたその壁は、細い筋のようにきらきら輝いて見えた。

もう一つの高台はかつて大君の墓所であった土地で、その隣にあるのは壮大な芝の寺 [増上寺] である。また目を転じれば、かつて大君の遊興地であった土地 [浜離宮] も見える。そこには木々や草花が植えられ、遊歩道や小さな池もあって、どこかセントラル・パークを思わせた。路地といい大路といい江戸の道は限りなく四方八方に張り巡らされている。また頑丈な木橋を渡した水路が数多く見受けられた。海端に目下建設中の建物は官立海軍学校となる予定、さらにその向こう側には丸屋根を備えたホテル [築地ホテル館] がある。われ

¹ 「ストーンウォール・ジャクソン」号はおそらく「ストーンウォール」号の誤り。

われの上陸地点は広い川のちょうど河口部分だったが、この川が市街を抜けて江戸湾へと注ぐ形になっている。川には様々な種類の粗末な小舟が行き来していた。地面を見ると、二年近く前に爆発事故を起こしたボイラーの破片が落ちている。この事故で、二人の宣教師をはじめ数人が命を落としたという。

ホテルはすぐ近くにあった。これは、ある日本の業者が建てたもので、壮大な建物には違いないが面白みに欠け、ぼつねんとした様子は納屋のようであった。移動の際は一人ひとりジンリカシャ〔人力車〕に乗った。人力車というのは乳母車を大きくしたようなもので、半裸の日本人が一台一台牽く。速度はかなり速く、まことに愉快的な乗り物である。江戸滞在の最終日には20マイル以上乗りとおした。

ある晩、ホテルのプライン夫人の部屋で祈祷会が開かれた。聞くところによると、この壮大なる異教の都市にあって祈祷会なるものが開かれたのは全く初めてなのだという。会には17人が集っていたが、うち4人は日本人の紳士であった。その中の一人が翌日になって訪ねてきて、とある高官の娘をプライン夫人の「ホーム」に受け入れてもらえないかと打診してきた。（「アメリカン・ミッション・ホーム」はニューヨークの婦人一致伝道協会の管理下にある。）

「ホーム」を運営する婦人たちが、特定の教育事業のみにとどまらず、より幅広い感化を与えつつあることは太鼓判を押してもよい。後者については実際のところ、どんなに評価してもし過ぎることはない。毎週「ホーム」で開かれる祈祷会は宗教的な影響力の中核を形づくるであろう。またプライン夫人はたぐい稀なる品性を示し、あらゆる面で自ら模範となり善行を喚起しているのである。

2. *New-York Evangelist* 第 2209 号 (1872 年 7 月 25 日)

日本

陸の旅・海の旅

エドワード・ワレン・クラーク

1872年5月16日、日本、静岡にて

ふだんの平穏な日常の繰り返しとはうって変わって、ここ数日というもの大事件に引きずり回されていた。予期せぬひどい歯痛を抱えた私は飛ぶようにして横浜へ行き、クロロフォルム治療を立て続けに受け、帰りはアメリカ領事や

旗艦「コロラド」の将校一行と一緒に静岡まで船旅をしてきたのだから、日常も脅かされるというものだ。全体を通してなかなか劇的な出来事だったので、今またここで一人振り返ると、あれはつかの間の夢だったに違いないとさえ思えてくる。

5月4日のこと、私は午後の間ずっと齒の痛みに苦しめられていた。晩になって、二年ほど前、[スイスの] インターラーケンにただ一人取り残された時と全く同じような状況に陥るに違いないということが分かった。眠りがこの悲しみを紛らわしてくれることを祈りながら、家中すべて締め切って「クローラル」[鎮静剤]を大きじ二杯服用し、ベッドに入った。しかし「願ひむなしく」とでも言おうか、身も心も鉛のように重いのに痛みは増していくばかり、結局一睡もできない。夜通しあちこち歩き回ったり瓶をひっくり返したりして過ごし、夜が明けると学校に人をやって発電装置やエーテルを取り寄せた。電流で少しは楽になったものの、それも長くは続かなかつた。昼ごろになって、この上はすぐにも横浜へ行かなくてはならないものと心を決めた。そうするより他なかつたのだ。一時間もしないうちに馬車や荷ごしらえが調い、ほどなくして気づいてみると、通訳と護衛一人を伴った私はひた走る車中に旅の人となっていた。この界限の道は決して馬車が通るようにはできていないし、ましてこの時のような速度に堪えうるものではない。とはいえ、特に道の悪いところでは降りて歩くなどして切り抜け、思いのほか速く進んだ結果、日暮れ頃には出発点から約25マイル [約40キロメートル] の位置に達していた。

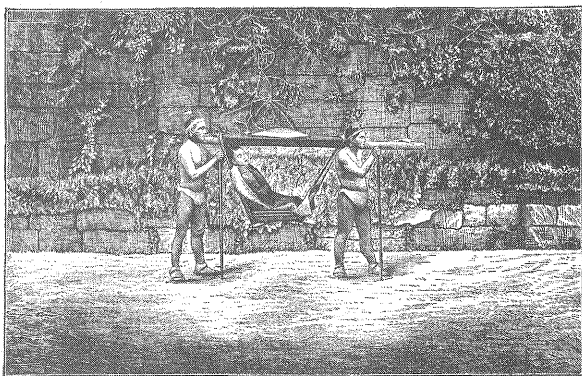
その日は日本間の畳の上で転げ回り、不快な一夜を過ごした。宿では私が快適に過ごせるように最大限の配慮をしてくれたが、結局は翌朝まで眠れず、また気分も大して休まらないまま寢床を出ることになった。さらに口の中では痛むと最も困る部分までもが少しずつ腫れ上がってきて、そのせいで圧迫された口はほとんど動かせなくなってしまった。話すこともままならなければ食事をとるなど問題外だ。せいぜい出来ることといえば、付き添いの者たちが持参のうまさうな食料を旺盛な食欲でばくつついているのを、ものほしように眺めていることだけだった。どうにか少しでも米を口に突っ込もうとはしてみたが、結局それも徒労に終わり、われわれは再び先へ進むことになったのだ。

ここからもまた馬車を使った。箱根の峠に差し掛かるまでは馬車で行けるが、そこから先は馬車の代わりに人間が肩で担ぐ「カゴ」に乗り換えねばならない。この日は見事な空模様というか、夜明け前ながらそうなりそうな気配があった。あたりは一面穏やかな様子で、第二の「ベウラの地」[キリスト教で憩いの地と

される]を思わせる。やがて近くの丘の向こうから朝の光がゆっくと這い上がり、灰色の霧を押しつけながら天空に鮮やかな縞模様を描き出した。そしてついに東の空から太陽の黄金色した光彩が山の頂を縁取ったかと思うと、今度は目も眩むような閃光へとその姿を変え、かくして妙なる海を従えたお天道様がとうとうお出ましになったのである。もの珍しく美しい光景も手伝って、この早朝の道行きにはささやかながら浮世離れした情緒があり、齒の痛みさえ気にならなければどれだけ楽しめたことかと悔やまれるほどだった。ここからは富士山の山裾近くを進んでいくので、なだらかで均整のとれた斜面から純白の笠雲をかぶった山頂に至るまで、その雄姿が余すところなく目に入ってくる。ヤンキー少年が富士山の近くに連れてこられたとして、真っ先に目を惹くものといえば、上から下まで冬のソリ遊びのために作られたかのようなこの斜面であろう。実際この斜面は何かそういう目的があって削られた感さえあって、おまけに漆塗りの箱や茶箱の意匠にもびったり合いそうである。随一の大街道である東海道の中でも、この辺り一帯の様子というのは目だって美しい。道の両側には美しく雄大な松がずらりと並んでいるのだが、その張り出した枝は幾世紀にもわたって、この道を行き交った数知れぬ旅人たちに葉陰をおとしてきたに違いない。こうした老樹の姿は（少なくとも私にとってみれば）、この界限で最もゆかしく興味を引く景物のうちに数えられる。木々の間を吹き抜ける風の音に心引かれて耳を傾ければ、今では知る由もないような昔の不思議な場景を追悼しているかのように思えてくるのだ。今まさにわれわれが差し掛かったこの周辺というのは、静岡と比べてずっと肥沃でまた手入れも良い土地である。ただ何せ日本の農地というのはどこも同じような様子で、土地は一々区分けされ、年中水を張った田がほとんどである。この地方で育てている野菜は数多く、私の今まで見てきたどの土地をもしのぐ種類だ。私はこの前日、作物の詰まった巨大な袋を担いで静岡へ向かう人々の姿を目にしていたのだが（静岡は駿河の国の中心地である）、それはわれらが大参事の課した税を納めに行くところなのだ。われわれのようにこうも朝早く通り過ぎると、村々のたたずまいも一風変わって見える。どの家もすべて表を立て切っていて、風雨にさらされてきた雨戸を互いにぴったりと嵌め合わせてあるので、村全体が窓のない納屋の連なりのように映るのである。たまにお婆さんが朝の散歩をするのに出くわしたのだが、走り過ぎる馬車に驚くあまり立ちすくんでしまった。今日もきっとこのお婆さんは、畏れる村人たちを相手に、不可思議な異形のものに度肝を抜かれた明け方のできごとを語り聞かせるのに忙しくしていることだろう。そう

こうするうちに沼津の町、箱根峠の玄関口にたどり着いた。ここでカゴの用意ができるまで少しの間休憩した。同行の者は軽く食事をとったが、私は部屋の側にある池を泳いでいる大きな金魚にパンのかけらを投げてやって慰めとした。この時はまだ何も食べられない状態だったので、自分の口を満たすより魚の口を満たしてやるほうが手軽いようだった。この地を最後に馬車は返すことにしたのだが、しかしあの気の毒な老馬は——電光石火の旅立ちがずいぶん酷な刺激となったのだろう、静岡に戻った翌日に力尽きてしまった。日本の馬はあまり頑強とはいえない。ことに馭者が歯痛に苦しむ時にはなおのことだ！ あの馬が燕麦と青草の広がる天国に召され、善良な馬たちと暮らさんことを願いたい。それだけの働きをしてくれたのだから。

ところでこのカゴというものは、風変わりな乗り物である。籐椅子の脚を外したようなものをしっかりと太い木の棒で吊り、その中に人間がしゃがむように座りさえすれば出来る上がりだ。乗る者の取りうる道は、天井で首を傷めるか床で脚を折



RIDING IN A "KAN-GO."

るか、二つに一つである。この乗り込む方法というのが、未だによく分からない。私はふだん体を放り出して転がり込み、正しく乗れるかどうかは運任せにしている。この次に駕籠で旅する時は、箱に入って「ワレモノ注意」の札を貼り付けることにしようかと思っている。駕籠かきたちの揺さぶり回すことといたら凄まじく、例の小走りが始まると乗った人間はもう生きた心地がしない。ただ、彼らがゆったりと歩いている時であれば全く支障はないし、また二、三時間ずっと足を結わえつけられていることに一旦慣れてしまえば、そして同時に首も強張った状態にさせられて諦めがつけば、まあかなり快適になるだろうし、そのうち揺りかごで寝かしつけられているような気持ちになれるはずだ。苦力は一定の調子で担いで行くが、五分ごとにその場で立ち止まっては太い竿を竹製の杖の上に乗せて一息つき、すぐに逆側の肩に担ぎなおして、またそれまでと同じように歩き始める。男たちの裸体に光る汗は背中から滴り落ちるほ

どだが、彼らはいした疲れも見せずに相当な距離を担いで行く。山道の途中にはいくつか小屋があって休めるようになっているのだが、裸男の一群が火の周りを跳ね回りながらめいめい片手に湯気の立つ飯碗を持ち、もう一方の手に箸を持っている様子は見るもおかしな光景であった。空腹が十分満たされると彼らは茶を一杯飲み、たっぷり平らげた飯を腹に流し込むのである。

すっかり山を越えてしまうまで、およそ八時間を要した。道中は見事な景観で、山々に取り囲まれた可憐な箱根湖〔芦ノ湖〕は、あらん限りの魅力をたたえていた。峠越えの道に行く途中で一人か二人、裸で走る人に行き会った。これが郵便配達夫で、広いつばのある帽子をかぶり、棒のついた小さな挟み箱を肩に担いでいる。私がふだん以上の興味をもって彼らに視線を送ったのにはわけがあって、静岡を出るときに国許からの手紙を今か今かと心待ちにしていたので、もしかしたらその手紙が今ここでまさに目の前を通り過ぎていくのではないかと気が掛かったからなのである。後にわかったことだが、その手紙とは実際にあの山道ですれ違っていたのだった。手紙が静岡に着いたのは、出立のまさに翌日だったのである。山頂を越えてからの下り坂は大変険しく岩がちだったが、苦力たちはその急坂をわれわれを担いで早足で下っていく。その速さたるや大胆極まりなく、けっして安全そうには見えなかった。彼らは大層な健脚ぶりで、その助けがなければ私は幾度となく崖から転がり落ち、頭部損傷の危機に見舞われていたに違いない。

山を越えてからは、駕籠を人力車（人間の牽く車）に乗り換え、目いっぱい速度で突き進んだ。ほどなくして海端にさしかかり、そこからは何マイルも岸辺の道が続く。道は砂地で、あたり一帯の村々はひらけていて、数もなかなか多かった。「人力」車の動力が尽きるとすぐに新しい俵を雇い、道中なるべく時間を無駄にしないよう心がけた。行く先々で目にした数多くの印象的な物事、ことに川越えの話などをここでお伝えするのも悪くないのだが、全行程中で他の何にも増して心嬉しくまた何より慕わしかったのは、真新しい電信の架線であった。江戸から静岡までの全線が開通したのはつい先頃のことである。出掛けに東海道で出くわした一本きりのこの導線が、一路私を文明へと文字通り繋いでくれる存在に見えた。また厳かにすくと立った電信柱の一本一本が、通り過ぎる私を一步ずつ19世紀へと導いてくれるように見えたのだった。そうしてついに、懸命の車旅の結果、フシガマ〔藤沢か〕というところに到着した。ここでわれわれはしばし休息をとり、その先の最善策を思案した。時すでに夜の九時であり、日もとつぷりと暮れている。朝四時すぎに宿を発ったときには、

その日のうちに横浜へ着こうなどという見通しは立てていなかった。しかし私は、もうこれ以上道半ばで昨夜のような時間を費やしはしないと心を決めた。横浜までまだ18マイル〔約29キロ〕あると言われはしたが、何があろうと闇の中を突き進もうと思ひ定め、また新たな人力車と提灯を用立てた。言わせてもらえば、歯痛ほど人を行動に駆り立てるものは他にないだろう！もし信じられないのなら、折を見て試してみる事だ。私は車夫たちを急ぎ立て、素早く用意をさせた。やがてわれわれはガタガタ音を立てながら全速力で山道を下り、悪路を走っていたのだった。曇り空で月明かりもなく、星のひとつも見えはしない。ひっそりと静まり返った闇の中、身の回り三尺ですら見えるものは何一つなかった。私は俵の幌を顔まで引き下げて目を閉じ、今度は溝に落ちるか今度は土手を転がるかなどと一々気にしないことにした。事実一度か二度は危うい場面もあったが、空腹と眠気ですっかり憔悴しきって疲労と痛みで苦しんでいたから、自分の置かれた立場に気を払う余裕がなかった。

東海道が横浜に差し掛かったところで進路を右に取った。急な下り坂をいくつも通って湾のほとりにさしかかると、そこはもう神奈川の港である。俵の幌からそっと覗くと、港に浮かぶ船影の向こうから淡い光が海を渡ってくるのがかすかに見えた。砂浜に打ち寄せる単調な波のさざめきのほかに何の音も聞こえはしない。夜半過ぎに立派な橋を渡ると往来や家々の様子が見えてきて、横浜にやってきたのだとすぐに実感できる。衿の厚い上着を羽織った夜回りがすれ違いざまに鋭い視線を投げかけてきたが、耳障りな音で拍子木を打ち鳴らして異常なしを告げていった。市中に足を踏み入れると懐かしさがさらに深まったのだが、自分がこの地にいるというのは何とも不思議な感覚である。六ヶ月ほど前にこの地を離れた時には、馬の背に揺られ、五日間をかけて静岡にたどり着いたのだった。そして今回は（歯痛のおかげをもって）同じ道りをわずか一日半でやってきたのだ。護衛と通訳には旅籠屋へ行ってもらい、私は新たに人力車を雇って「山手48番地」にあるプライン夫人の家を目指すことにする。道すがら見えた横浜の姿は、わずか六ヶ月の間に驚くべき発展をとげていた。丘に登り、門をくぐりながら時計に目をやると、針はもう二時近くを指している。ここまで上り坂を牽いてきてくれた「人間の馬」に提灯を返してやって奥に進み、バルコニーの窓を叩いて何とか入れてもらおうとした。バルコニーのところどころに家具が置いてあるのは、きっと「大掃除」が日中に行われたからだろう。

しばらく窓を叩いているとカーテンが揺れ、天使のようなローブ姿で「どち

ら様？」と誰何の声。人影の主が誰かはすぐに分かった。ほどなくして私は、この夜更けにも関わらず、たっぷりの新鮮なミルクと一片のケーキを前にして座ることに相成った。——このミルクこそ、かつて横浜を離れたとき以来はじめて口にした本物のミルクであり、そしてまたここ三日間で唯一満足に口にできた食物だったのである。

その夜はおよそ三時間の睡眠をとった。翌日の記憶はあまりはっきりしないのだが、鉗子とクロロフォルムによる治療の後、結局のところは五時間におよぶ頭部の神経痛に襲われねばならなかった。これが他の痛みをはるかに上回る辛さなのだった。苦しいひと時であっただけに、「ホーム」に滞在できたことがどれだけ幸いだったか、周りの人たちの母のようないたわりと同情がどれだけ有難かったことか、皆さんにも深くご理解いただけることだろう。

その日は折よくグリフィス [W. E. Griffis] 氏も江戸から下ってきていたので、あくる晩は二人で一緒に眠った。懐かしいあの頃と何も変わらなかった。それにしても何の暗合か、かつて二人で枕を並べて寝た最後というのが、実は今回と同じようにインターラーケンで歯痛に見舞われた翌晩のことだったのである。しかもスイスでお互い離れ離れになる前日の出来事だった。二度もこうして「痛み」が絡めば、いくら二年越しの出来事とはいえ、また一万二千マイルも離れた土地のこととはいえ、何か因縁があっても決しておかしくはないと思うのだ。

3. *New-York Evangelist* 2210号 (1872年8月1日)

日本

陸の旅・海の旅

エドワード・ワレン・クラーク

1872年5月16日、日本、静岡にて

朝ベッドから起き上がって正気を取り戻すと、国許からの手紙の束が飛び込んできた。こちらに来る途中で行き違いになってしまった手紙が、いったん静岡まで行って送り返されてきたのだ。この時点ではもう手紙を楽しめるだけ気分も回復していたし、手紙の存在がどんな面倒をも忘れさせてくれた。

手紙に目を通してしていると、アメリカ領事シェパード大佐 [Charles O. Shepard] が訪ねてこられた。役人や様々な人を引き連れて駿河へ視察に行く予定がある

ので、ついでに清水（静岡に一番近い港）まで便乗して行ってはどうかという。出発は翌朝三時とのことだ。実は数週間前、私のもとに大佐が立ち寄ってくださらないだろうかと考えていたことがあり、そのとき、今回の大佐の旅の目的というのが、駿河における茶の栽培状況や栽培方法の視察をすること、そしてその結果をアメリカ政府に対する公式報告書に取りまとめることであると知った。この視察旅行には横浜在住の茶商も二、三人加わる予定で、全てまとめるとちょっとした遠征隊になることが予想される。シェパード大佐はアメリカの茶輸入に関する興味深い統計をご教示くださったのだが、それによれば、ここ数年間で日本茶の消費が著しく増加してきたという。その上、日本から輸出される茶のうち九割が合衆国で消費されているというのだ。たしか大佐によれば、サンフランシスコの税関では茶の関税だけで年間百万ドル以上に達しているとのことだから、この驚異の作物の栽培状況や今後の増産見込みを把握することは、当然わが政府にとって相当な関心事であろう。加えて、輸出される茶の中でもかなりの割合が今私の住んでいる駿河の国で産出されたもので、質の点においても駿河の茶は日本第二の地位を誇るのである。

今回の大佐の話は大変ありがたかった。船で帰れるおかげで、もうめっちゃくちゃに振り回されながら陸路を行かずに済むのだ。というわけでその日の午後には「お買いもの」に当て、また船と一緒に運んでもらうため、余分の備蓄用食料を確保した。翌朝三時半ごろ、すさまじい唸りをあげてエンジンが始動し、われわれの船は湾を出て広い太平洋へ乗り出した。決して大型ではないこの蒸気艇 [steam yacht] だが、性能のほうは折り紙つきだ。舷側に四、五門据え付けられた大砲は真鍮製で美しく、この日は好天と良風とに恵まれたこともあって、船足もすこぶる軽快であった。この愛すべき船にはちょっとした由来がある。実はこの船、ビクトリア女王から最後の^{クイーン}大君 [徳川慶喜] ——今は静岡に隠居している——に贈られたものなのだが、日本で内乱が起こった際、尊皇派の手に落ちないように幕府方が長崎近くの海中に沈めてしまった。ややあって船は日本政府からアメリカ人ウォルシュ・ホール氏² [ママ] へと申しわけ程度の価格で譲り渡された。彼は船を引き揚げ、上海へ回送して修理させたのである。何はともあれ、「愉快な旅仲間」と一緒になって、これだけの好天にも恵まれれば、東の間の航海でもちょっとした旅行気分を感じるものだ。それにつけてもひしひしと感じられたのは、同じ日本の海岸線を目にしていながら、受け

² ウォルシュ・ホール商会を人物と取り違えたものか。

る印象や感覚が六か月以上前に初めてこの場に入港した時の経験と随分異なったものであることだった。

あの時の私は異境へと臨む一人の異邦人に他ならず、胸の内には何かと不吉な想像ばかり渦巻いていた。私にとってこの海岸線は知られざる辺境の地のように映った。奇妙な造りの家々や野ざらしのジャンク船を見れば人食い人種の持ち物であるような気がして、今に私はぺろりと食べられるか首を刎ねられるか、そんな目に遭いはしないかと思っていた。それがもう今ではあたかも地元にいるかのように落ち着ける場所になり、こうしていても「ダニエル・ドリュエ」号の船上でハドソン川を眺めているような心持ちでいられる。あのときのあの海岸が、今では世界中のどこよりも身近な場所が変わっている。木立の中に寺院や家々の姿を認めても、私がここ数カ月間生活の場にしてしている寺院や家々と大差ないものと感じられた。古びたジャンク船にしても同じことで、こちらで過ごすことになってから日々食卓に上る美味しい魚を獲るのに役立ってくれている。南西の方向に目を転じてみる。初めは奇妙なところに見えたその一帯は、もはや私にとって異郷の地などではない。その証拠に、私の頭の中にはその地方全体の様子が地図のように思い浮かぶ。というのも、あの辺りはあらかじめ巡りつくしてしまったからだ。霧深い山々を見た同行者たちは、それがずいぶん奥地にあるものと思ったようだが、私にとっては何度か散策したことのある山々で、見分けがついた。

夕方近くになって、船は長く突き出した岬を回った。清水港に入るにはいったん岬の鼻先を折り返さなくてははいけない。そこからは針路を北西にとってまっすぐ進むのだが、何とか暗くならないうちに港へ着ければと希望をかけていた。それに、その夜は自宅に戻って眠れるだろうと堅く信じていたから、早くも夕食は何にしようかなどと考え始めていた。しかし、ライスケーキと蜂蜜、柔らかなベッドに羽根枕という私の算段もむなしく、いつまでたってもなかなかそこにたどり着いてくれない。あっという間に夜のとぼりが下りてきて、湾の入口には真っ黒な雲の塊がまるで進入を拒むかのように伸び広がってきた。風向きも一変し、南の海からは猛烈な波が押し寄せてくる。われわれも負けずに、休みなく帆綱を引き絞りながらじつくりと船を進めていったのだが、浅瀬にたどりつく気配がない。闇がじわじわと差し迫ってくる中、果たしてこの沿岸には灯台のひとつもなく、針路を見極めるには細心の注意を要した。目的地の港を描いた海図はプロシアの測量に基づいた小ぶりのものが手元にあって、それによればこの辺りの海は次第に浅くなっているのではなく、岸辺近くまで深い

ようである。とすると、われわれは海岸に接近している可能性もあるのだが、水位を見たとしても近づいているかどうかの判断材料には全くならないということだ。

船上には日本人の水先案内人が、あるいは少なくともそう名乗る者が乗り組んでいたのだが、この男がまごまごするばかりで何を言っているのかさえ分からない様子だった。そのため、正気に戻すためにちょっと帆桁の端に乗せて揺さぶってやろうという話まで持ち上がった。私の通訳と護衛の者はいくらかこの港のことを知っていて多少の助けになったのだが、私自身はこうして海路で来たことがなかったため、大して情報を提供することもできない。われわれは二、三分おきに水深を測りながら、できる限りゆっくりと船を進めていく。行くうちに一度だけ日本の船とおぼしき光がちらっと遠くに見えたこともあった。何とかその船に追いついて水夫をこちらの船に乗せてやろうとしたのだが、速度を出しすぎる危険を考えると追いつくことは出来なかった。少しずつ北に向かって進んで行くと、突然低くくぐもった波音が耳に届いた。隣に座っていた役人が飛び上がって「暗礁だ！」と叫び、すぐにエンジンを逆回転させる。経験豊富な船乗りの目が暗闇の中を見通し、まわりが陸地であること、そしてわれわれが完全に取り囲まれたような状態らしいということを察知したのだ。しかし乗組員たちは、この位置まで進入してきた時と同じように、ここから脱出する方法も心得ていた。すぐに船を逆進させてその場を離れ、湾内を全速力で後退してゆく！ 結局手探りで入港しようとすることはあきらめて錨を下ろす場所を探してみたのだが、それも見つからず、湾内を後戻りしているうちに陽もすっかり沈んでしまった。私は船室に取って返し、寝台に倒れこんだ。次に甲板に戻ったときには、船は前の晩暗闇にまぎれて見つけられなかった地峡部分を旋回しているところで、その後すぐわれわれは清水港内に無事錨を下ろしたのだった。夜明け頃になると船は再び向きを変え、湾内を奥へと進んでいく。もし暗い時にそのまま進み続けていたら、富士山のふもとにぶち当たっていたか、そうでなければ山に登ってしまっていたかもしれない！ 小舟に乗り移って上陸すると、すぐさま私は人力車を飛ばして静岡へ向かい、大人数の乗客に備えて家中の用意を整えることにした。大参事もお招きしてシェパード大佐とのディナーが開かれることになり、双方全員がわが家に集まった。その場での話し合いで、茶栽培の視察には具体的にどの地域を選択するかという段取りもつつがなく決まった。一行の姿が静岡の人々に強烈な印象を植え付けたことは、皆さんにも容易にご想像いただけるはずだ。外国人が一ダース近くも

やってきて、そのうえ一行中には目にも鮮やかな軍服姿もあったわけだから、まさに空前絶後の光景だったに違いない。

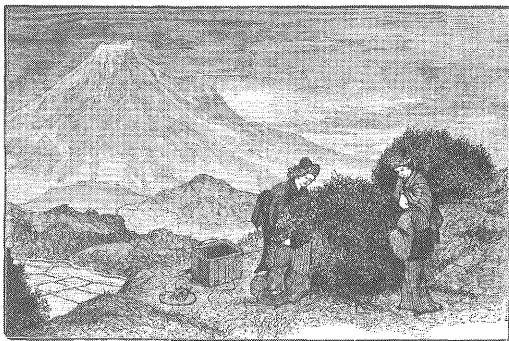
率直に言って、静岡にこれほど多くのアメリカ人を迎えるというのは私自身にとっても本当に新鮮な体験だった。彼らが滞在したこの三日間は確かに目の回るような忙しさで、特に食事の面では大騒ぎだったが、嬉しさのほうは回るかに上回っていた。大佐一行とのディナーには大参事はじめ県の役人たちを二度ほど招待したのだが、せっかく合衆国領事がいらしている機会だからということで、先の大君ご当人にもディナーの席にお越し願えないか打診してみた。しかしさすがに特別の上にも特別な大君殿下であるだけに、世をはばかれること尋常ではなく、表立たぬよう身を潜めておられるようで、また流刑中の相談役となった方々が何かにつけてご進言申し上げるという状態でもあることから、とうとう彼を動かすことは一寸たりともできなかった。どうしてもお出でにはなれないというのだ。人見〔寧〕氏という役人を通じて私は今回のお誘いをしたのだが、この人は大君と極めて親しい間柄で、幕府方が箱館で必死に最後の抵抗をした際にいくつもの部隊を統括指揮した人物である。現在その人見氏が学校〔静岡学問所〕で私と一緒に働いていて、大君殿下がディナーにいらっしやらないことを大変悔しがっていた。それでも人見氏自身は来てくれたし、また向山〔黄村〕氏の姿もあった。向山氏は数年前、日本のごく初期の遣欧使節団〔1866年、徳川昭武に随行してパリに赴く〕で上席を務めた経験を持っている。この紳士が今学校の頭になっている。ただ彼は最近まで漢学部門にしか関心を持っていなかったようだ。

シェパード大佐と役人の一行は、駿河の旅を大いに楽しんでいただようだ。特に私の家とその周辺、それに学校と新設の講義室その他には非常に感心したと言っておられた。家にはベッドが四床しかなく、全員に寝床を提供するには苦心したが、それでも板の間だけはたっぷりあったので、露営を覚悟してきた彼らには十分快適に過ごしてもらえたようだ。

彼らは一昼夜を山村部で過ごしたのだが、その目的地までは日本の「乗物」〔乗物駕籠〕で担がれていった。乗物というのは小ぶりの家のような形をしていて、これが集団で一斉に出発したものだから、一見すると小さな村が移動しているような感じである。一行は心行くまで茶の産地を視察したが、全体を通して非常に充実した時間となったようだ。その夜は大きな寺に泊まり、布団で眠ったという。帰ってきた彼らは晴れやかな様子で、食事ももりもり食べ、とても楽しく過ごせたと報告してくれた。写真の器材を持ってきていた役人がいたので、

一緒に静岡の風景を収めて回った。そのうちの何葉かは国許に送ってもらえるよう頼んでみるつもりでいる。ただ、近いうちに自前の写真器材を手に入れようと思っているので、それが叶えばたくさん写真を送れると思う。

茶栽培視察に関するシェパード大佐の報告は、いずれおそらくアメリカの新聞紙上に掲載されることだろう。また同行した茶商の一人、チャーチ氏もどうやら「ニューヨーク・タイムズ」紙に記事を寄せるらしい。——ご興味の向きがあれば、詳しいことはそちらを参照されたい。私が一行を帰りの船までお送りすると、彼らは温かいもてなしに感謝し、祝福の言葉をかけてくれた。日本の小舟に戻った私は船端を離れ、蒸気艇の彼らと別れのしるしにお互い拳銃を空に放って大声で挨拶を交わし合った。彼らは夜半になって出港、蒸気を上げて湾を後にする。一方の私は雨と暗闇の中、馬の背にまたがって静岡へと引き返すのだった。



A TEA PLANTATION - FUJI-YAMA IN THE BACKGROUND.